



海底軍艦



川崎ゆきお

「寒いと固まってしまいますなあ」

「フリーズです」

「氷のように固められる？」

「瞬間冷凍、一瞬です」

「冷凍砲のような」

「砲？」

「はい」

「そんな大砲があるのですかな」

「海底軍艦が搭載しています」

「潜水艦ですか」

「空も飛びます。地中にも入り込めます」

「どうやって」

「鋸のようなものが先についているのです。ドリルのような」

「空想科学小説ですなあ」

「そうです」

「そんな与太話じゃなく、本当に体が固まるんじゃないけど、縮小しますなあ。体積が縮むわけじゃないですよ。いろいろと行動が萎縮的になる。気持ちも小さくなる。開放的ではなく閉鎖的に。しかし、この季節、それがいい。外じゃなく、たまには内を見つめるいい機会ですよ」

「ありますねえ。国盗りゲームでも、内政に勤め、国を豊かにする時期が」

「ゲームで内政ですか。何をするのでですか」

「新田を開墾したり、鉱山を探したり、あとはまあ、商売ですなあ。特産品を売りに行くとかね。他国では領地争いに明け暮れていますが、それに巻き込まれないように、内政に勤め、実力を蓄えるわけです。田圃が多くなれば、養える兵が増えるのです。商業に力を入れると、倉にお金も貯まる。それで軍備も整えられる」

「結局それで、戦に行くわけですか」

「いや、行く必要はないです。強い国になれば、攻めてきません」

「ほう」

「ところが落とし穴がありましてね、それで何十とある国が、徐々に減っていく。天下統一が進んでいるのです。それで、殆どがある大大名の国になる」

「じゃ、その大大名の国に従属すればいいじゃないですか」

「そうなんです、それでは天下統一を捨てることになります。このゲームの目的ですからね」

「じゃ、内政ばかりだと、負けるじゃないですか」

「まあ、そうなんです、簡単には負けません。大大名の天下統一をかなり遅らせます。言い忘れましたが、内政の他に外交もやってます。従属した大名に謀反をそそのかせたりします」

「ほう、素直に大大名に従えば、安泰なんですよ。領地も安泰なのでは」

「それでは、ゲームとして負けになる。一大名として終わるわけですからね」

「じゃ、どうするのかね」

「はい、一応抵抗するだけして、小競り合いで勝ちます。何せ、こちらは一枚岩で強いのです。敵軍は寄せ集めですからね。それで、和議に持って行く。これで、その大大名の配下にはなりませんが、実力者として、迎えられます。当然他のどの大名よりも領地は広い。兵力も多い」

「いやな存在ですなあ」

「そして、時期を待つのです。その大大名が没するのを」

「長いゲームですねえ」

「そうです。内政もいいのですが、力を蓄えすぎると、簡単には降参しない。これがいけないのでしょうなあ」

「まあ、私が冬場固まってしまうだけで、内政もする気力がないので、そんな力も蓄えられませんよ」

「はい、その方がすっきりしていていいです」

了